

聖書: ヨシュア記 24 章

説教題: 主に仕えなさい

日 時: 2010 年 10 月 10 日

ヨシュア記も今日が最終章となりました。前回の 23 章に続いて、もう一度ヨシュアの説教が記されています。この二つの説教に少しの強調点の違いはありますが、基本的メッセージは同じです。まるでヨシュア記を閉じるに当たって一回の説教では足りない、と言っているかのようです。ほぼ同じメッセージを二つ重ねることによって、ヨシュア記の著者は、この書を読み終えるに当たり、このメッセージをしっかりと心に刻むように！と私たちに語っているかのようです。

まずヨシュアがここで語っているのは、これまでイスラエルが受けた神の恵みについてです。ここではイスラエルの祖アブラハムにまでさかのぼって語られています。その彼について語られていることは何でしょうか。それは彼は偶像礼拝の家系出身であるということです。2 節に「あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。」とあります。神は決してアブラハムが立派な信仰者だったから、イスラエルの祖として選んだのではありません。主はアブラハムに驚くばかりの恵みを与えて、ユーフラテス川の向こうから連れて来ました。そして彼にカナン全土を歩かせ、この地全部を与えると約束し、子孫を与えて大いなる国民とすると約束されました。そしてイサクが誕生し、そのイサクから後にイスラエルという名を与えられるヤコブが誕生します。

次に主が述べているのは、モーセとアロンを遣わしたことと出エジプトの導きです。エジプトで奴隷状態を強いられていたイスラエルを、主は力強い御腕をもって連れ出されました。特に述べられているのは葦の海の出来事です。イスラエルはあの時、絶体絶命のピンチにありました。もはや自分たちはこれまでかという状況でした。しかしどこにも逃げ場がないと思われたその状況で、主が大いなるみわざを現されました。7 節にあるように、「主はあなたがたとエジプト人との間に暗やみを置き、海に彼らを襲いかからせ、彼らをおおわれた。」

8 節以降ではヨルダン川東側におけるエモリ人との戦い、またバラクとバラムの出来事、11 節からはヨルダン川西側のカナンの地の戦いのことが述べられています。いずれにおいても強調されていることは、主が彼らのために道を開き、彼らを導かれたということです。エモリ人との戦いにおいても、主が「彼らを根絶やしにした」と言われています。またモアブの王バラクが預言者バラムを雇ってイスラエルを呪わせようとした時も、主が彼に祝福の言葉を語らせ、救い出した、と言われています。またヨルダン川を渡ってエリコの者たちやエモリ人、ペリジ人、カナン人、ヘテ人、ギルカシ人、ヒビ人、エブス人をあなたがたの手に渡したのはわたし、主であると語られています。12 節の「くまばち」とは「恐怖」のことですが、敵は戦う前から恐怖によって心がしなえてしまい、イスラエルは難なく勝利することができました。

こうしてイスラエルは今、13 節の祝福を得ています。「わたしは、あなたがたがえるのに労しなかった地と、あなたがたが建てなかった町々を、あなたがたに与えたので、あなたがたはそこに住み、自分で植えなかったぶどう畑とオリーブ畑で食べている。」イスラエルはここに示された主の真実と恵みとを良く心に留めるべきです。彼らは今の生活を当然のように思ってはならないのです。主はアブラハムへの約束に真実であり続けて、ここまでの歩みを導いて下さいました。イスラエルはこのこと

にまず心から感謝する者でなくてはなりません。

もしこのことを心から認めて主に感謝するなら、イスラエルに残されている応答は一つしかありません。それは 14 節にあるように、「主を恐れ、誠実と真実をもって主に仕える」ことです。私たちはヨシュア記 1～21 章でまさにその主の真実を見て来ました。しかし私たちはそれを見て、ただ賛美して終わってはならない。その主に対して、私たちもまた真実にお答えする、という応答が引き出されなければなりません。ヨシュアはその際、15 節で「もしも主に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、ほかの神々でも、自分が仕えようと思うものを選ぶが良い。」と言います。イスラエルの民は 16 節以降で「わたしたちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。」と言います。しかしヨシュアは 19 節で驚くべきことを言います。19 節前半：「すると、ヨシュアは民に言った。『あなたがたは主に仕えることはできないであろう。』」せっかく民が「主に仕えます！」と告白しているのに、なぜこのような否定的なことをヨシュアは言ったのでしょうか。一言で言うなら、ヨシュアはここで軽々しい誓いに警告を与えているのです。ムードに乗った口先だけの告白では何にもならないこと、むしろそれは恐ろしいさばきを身に招くことを警告したのです。もちろんヨシュアはイスラエルが「主に従います」と告白して主に近づくことを望んでいます。しかし同時にその誓いは真実なものでなければならぬことを強調しているのです。単なるリップサービスではダメなのです。

ある人はこんな風に言っています。賛美歌の歌詞に時々、「あなたにすべてをささげます。」とか「愛します、わたしの主よ。」という歌詞が出て来るが、私たちはそこでヨシュアがここで警告した軽々しい偽りの誓いを主に対してしていないだろうか、と。またある人はお祈りをする際、「愛する天の神様」と始めた瞬間、「今の言葉は本当？」という天からの問いかけを受けた気がした、と言いました。もちろん、だからと言って「愛する主よ」とか「主にすべてをささげます」という言葉は口にしない方が良い、という意味ではありません。しかし私たちは本当にその言葉の意味を考えて言わなくてはならない。その気もないのに、勢いで、軽々しい誓いをしてはならないのです。自分の心を良く吟味して、真心からの主への献身と応答の告白をして行くべきなのです。

そうした告白の先に素晴らしい祝福があります。ヨシュアは 25 節で民と契約を結びました。すなわち神とイスラエルの民の契約更新がなされたということでしょう。実に神とこのように契約をもって結ばれることができることこそ、私たちの祝福です。「契約」と言うと、私たちは自分が果たす義務のことばかり考えて、窮屈な印象を持つかもしれません、神と私たちは同じ立場ではありません。聖なる神が私たちのような者と契約を結んで下さり、ご自身をそこに拘束して下さるのです。これは大変な恵みです。ウェストミンスター信仰告白第 7 章 1 節に「神と被造物のへだたりはまことに大きいので、神が私たちと契約を結んで下さるのは、「神の側のある自発的なへりくだりによる以外には、決してできなかつた。」とその恵みが賛美されている通りです。私たちが真心から、真実な思いをもって主に応答するなら、主はこのような契約関係を喜んで私たちと結んで下さる。あるいはすでに結ばれている契約を新しい、生きたものとして更新して下さる。そして私たちは「神の民」として、これからも主によって守られ、導かれることができる。この契約関係の祝福に、ヨシュアはこの最後の時にイスラエルの民を導いたのです。

29～33 節には 3 人の葬りの記録があります。ヨシュアは 110 歳で死んで、彼の相続地ティムナテ・セラフに葬られました。32 節にはエジプトから携え上ったヨセフの骨が、彼の遺言通り、約束の地の

中に葬られたことが記されています。33 節には、ヨシュアと共に奉仕した祭司エルアザルがエフライムの山地ギブアに葬られた、とあります。これらは単なる事務的な記録のように見えます。しかしこれらは、これらの人々がみな約束の地に葬られたことを語っています。つまり「イスラエルにこの地を与える」と言われた主の約束は本当に実現したことが、こういう形で最後にもう一度強調されているのです。ヨシュア記はこのようにして主の真実をほめたたえるもう一つの賛美歌をもって閉じられています。しかしその中で一つ、意味深い言葉があります。31 節：「イスラエルは、ヨシュアの生きている間、また、ヨシュアのあとまで生き残って、主がイスラエルに行なわれたすべてのわざを知っていた長老たちの生きている間、主に仕えていた。」 この言葉は何を意味しているのでしょうか。ヨシュアとその時代の長老たちが生きている間、イスラエルは主に仕えたが、その後はそうでなくなったということでしょうか。士師記 2 章を参照します。7 節に「民は、ヨシュアの生きている間、また、ヨシュアのあとまで生き残って主がイスラエルに行なわれたすべての大きなわざを見た長老たちの生きている間、主に仕えた。」と書かれています。そして 8～9 節にヨシュアの死と葬りが、今日の章と同じように記されています。そして 10 節に、そのあとに「主を知らず、また、主がイスラエルのためになされたわざも知らないほかの世代が起こった。」とあります。その世代は果たしてどうだったのか。続く 11 節以降を見ると、最悪の状況が書かれています。「イスラエル人は主の目の前に悪を行ない、バアルに仕えた。」 暗黒の士師記の時代の始まりです。おそらくヨシュア記の著者は、イスラエルのこのような状況を知っていたと思われます。だから今日の章の 31 節のような書き方をした。ヨシュア記の著者問題については色々な見方がありますが、ある学者たちは靈的に下降線をたどり始めた士師記の時代に、このヨシュア記の多くの部分は書かれたと見ています。すなわちイスラエルが正しい本来の道に立ち返ることができるように！遅くならない内に祝福の道に立ち戻ることができるように！という願いのもとに。そのためにイスラエル人がしっかり見る必要があるのは、このヨシュア記のメッセージです。すなわち主は真実なお方であるということ。ご自身の約束を成就されるお方であるということ。その真実な主を見上げて、イスラエルもまた主に真実な歩みをして行かなければならない。そのように主に結びつく歩みに、すべての主の祝福があるということです。

果たして私たちの生活はどうでしょうか。心がいつしか鈍って、士師記の時代イスラエルのような状態にあるということはないでしょうか。あるいはまだヨシュアの時代のように、主に結び付き、主に仕える生活をしているのでしょうか。どちらであっても私たちはこのヨシュア記を通して、約束に真実な主をもう一度はつきり見上げたいと思います。どんな困難が目の前にあっても、主は私たちに下さった約束を必ず実現して下さるお方です。その真実な主の前で、私たちの歩みはどのようなのか。もしそこにふさわしい応答の生活がないなら、悔い改めて、私たちも主に真実な歩みをささげて行くことができますように。主との関係を妨げるいかなるものをも除き去り、主こそを愛し、主に心を傾ける生活ができますように。口先だけでなく、自らの思いを吟味し、主の御言葉に従う生活を御前にささげることができますように。そうする時、主は喜んでご自身と私たちを結び付け、ご自身の真実をもってこれからも私たちを導いて下さるのです。その主に私たちのすべての信頼を置いて、主の真実と力強い御手によって導かれる神の民の特権と喜びと真に幸いな歩みへ導かれたいと思います。